

平成23年度デートDV実態調査について

山形県子育て推進部青少年・男女共同参画課

1. 調査目的

本調査は、若者層においてもDV事案が起きているものの、意識等の実態が明らかにされていないことから、デートDVに対する実態を把握・分析し、若年層に対する適切な支援の方法等を検討するための資料とすることを目的に実施した。

2. 調査設計

- (1) 調査対象：山形県内に在住する満20歳、21歳の男女個人
- (2) 調査対象者：上記の調査対象から、無作為抽出を行った3,000人
- (3) 調査方法：郵送配付—郵送回収
- (4) 調査期間：平成23年9月14日～9月28日（10月26日までの返送分を含む）

3. 調査項目

- (1) 『DV／デートDV』の認知度と学習機会
- (2) 恋人などからの行為における暴力としての認識と暴力の許容度
- (3) デートDVの実態・相談状況
- (4) デートDVの背景
- (5) デートDV防止のために

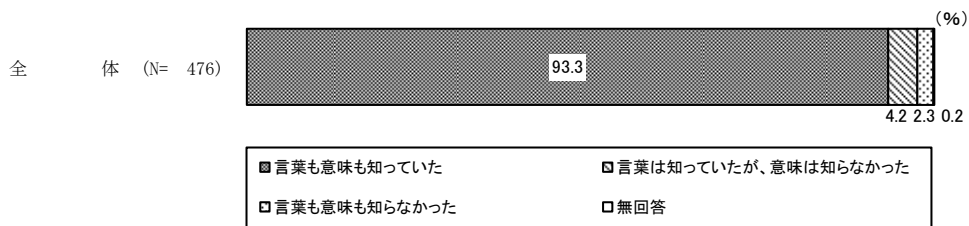
4. 回収結果

- (1) 回収数（率）：476人（15.9%）

5. 調査結果のあらまし

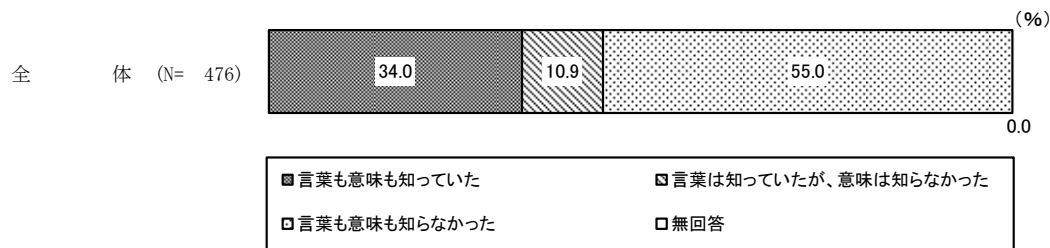
(1) 『DV／デートDV』の認知度と学習機会

① 『DV（ドメスティックバイオレンス）』の認知度

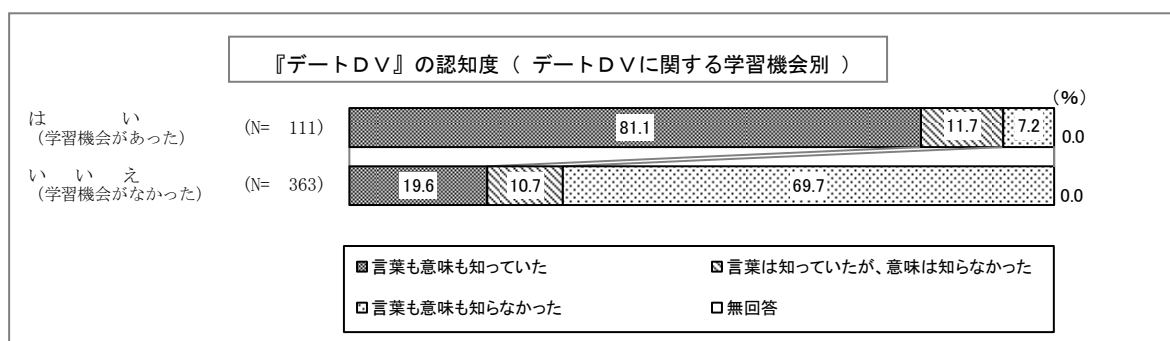


「言葉も意味も知っていた」人が93.3%を占めている。

② 『デートDV』の認知度



「言葉も意味も知っていた」人が34.0%と低く、「言葉も意味も知らなかった」人は男性が62.3%と女性（48.8%）よりも多くなっている。また、デートDVに関する学習機会別に見ると、学習機会があった人では「言葉も意味も知っていた」が81.1%を占めている。



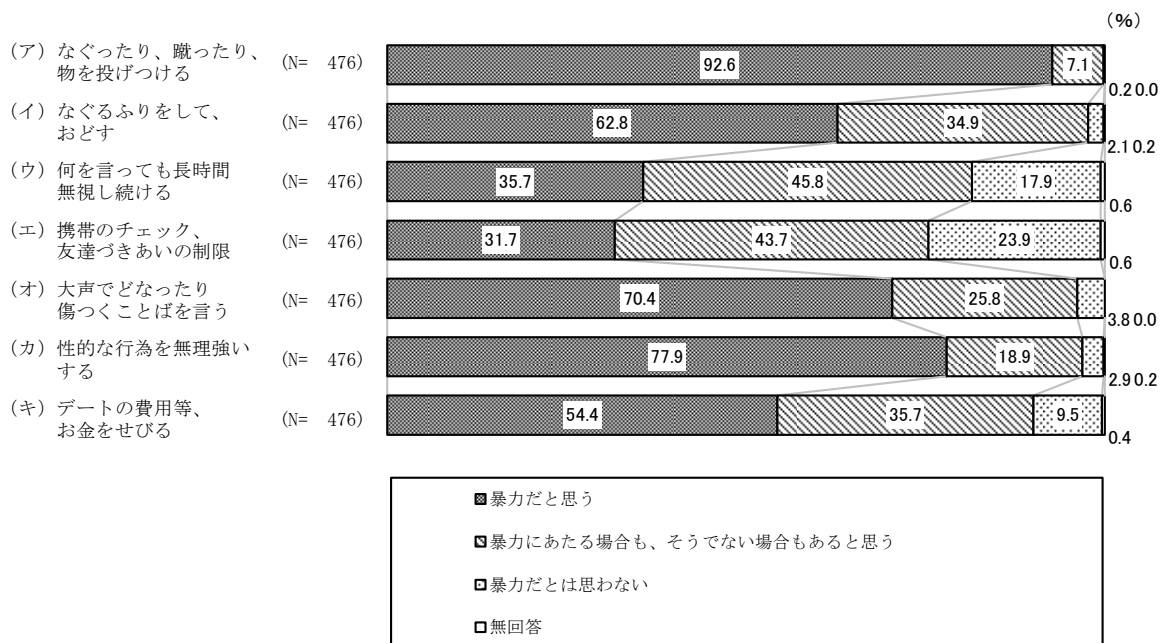
なお、学校の保険講話・いのちの日・保健体育・講義などで『デートDV』について話を聞くなど、これまでに学習機会があった人の割合は、23.3%となっている。



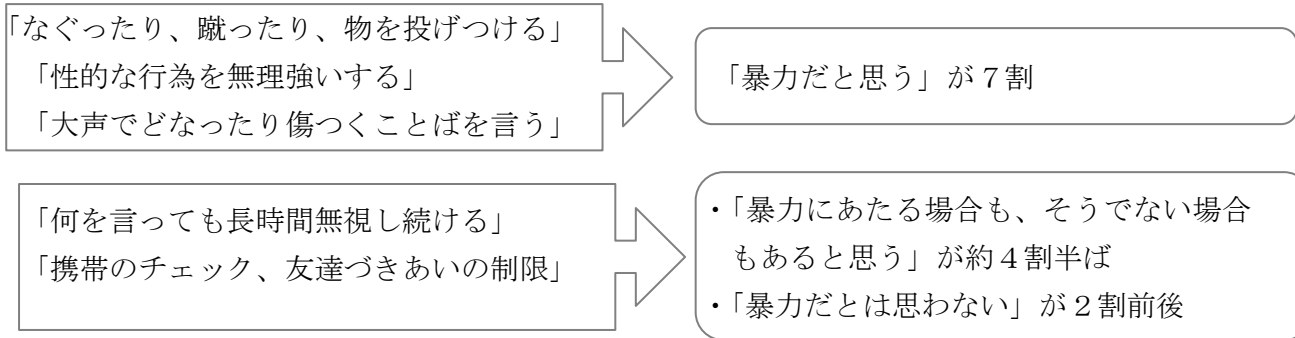
『デートDV』の言葉や意味の更なる周知が必要であるとともに、『デートDV』の周知には学習機会が重要なことがうかがえる。

(2) 恋人などからの行為における暴力としての認識と暴力の許容度

① 恋人からの行為における暴力としての認識



[恋人などからの行為において暴力だと思う態度や行動の認識]



身体的・性的な暴力は暴力としての認識が高く、精神的・社会的な暴力は暴力としての認識が低い傾向がある。なお、『デートDV』の言葉も意味も知っていた人は「暴力だと思う」との回答が多くなっている。

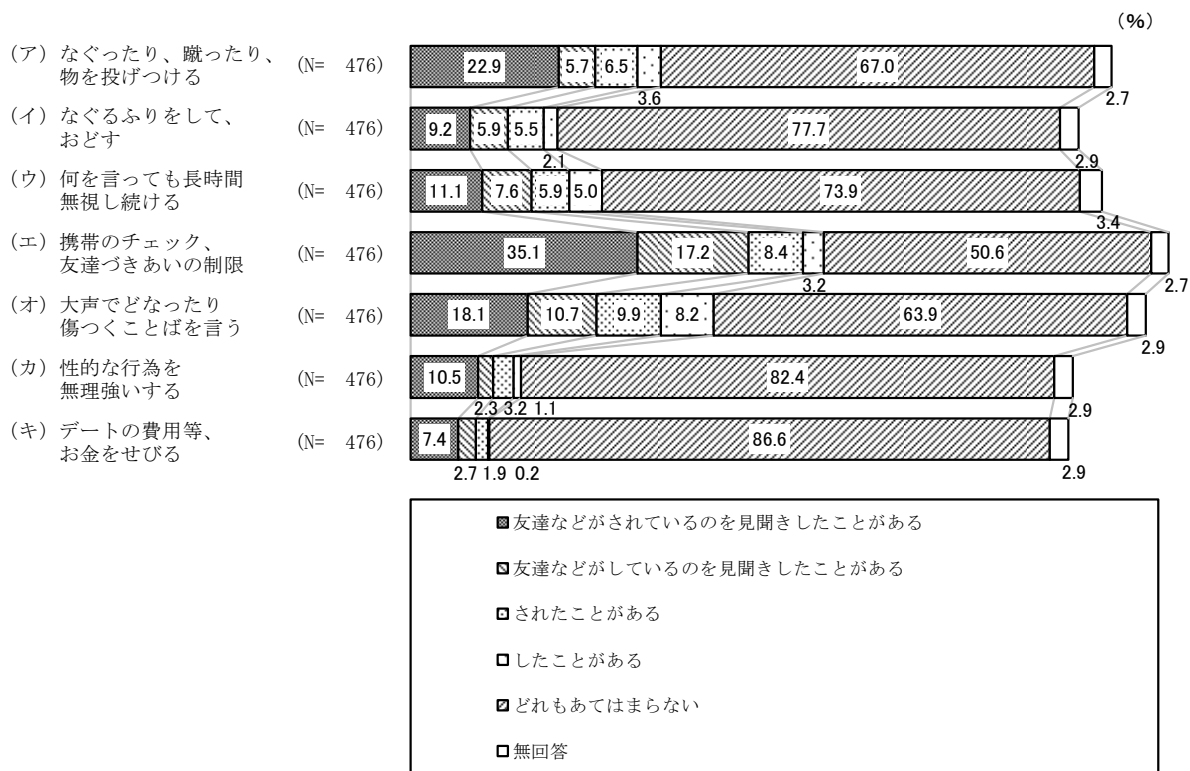
②暴力の許容度

デートDVにつながるような暴力に関する許容度については、暴力を許容しない考えを持つ人が73.1%を占めているものの、男性(64.7%)は女性(80.0%)よりもその意識が低くなっている。

身体的・性的な暴力だけでなく、精神的・社会的な暴力も含め、『デートDV』の正しい理解を促進していくことが必要であると推察される。

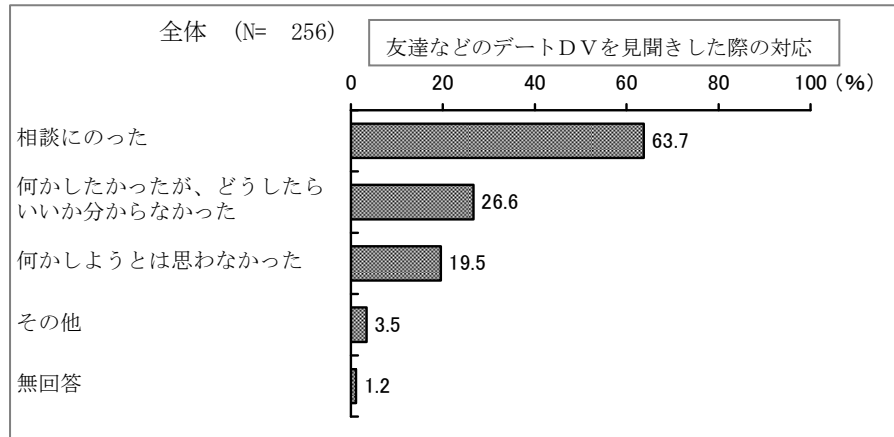
(3) デートDVの実態・相談状況

①デートDVの実態

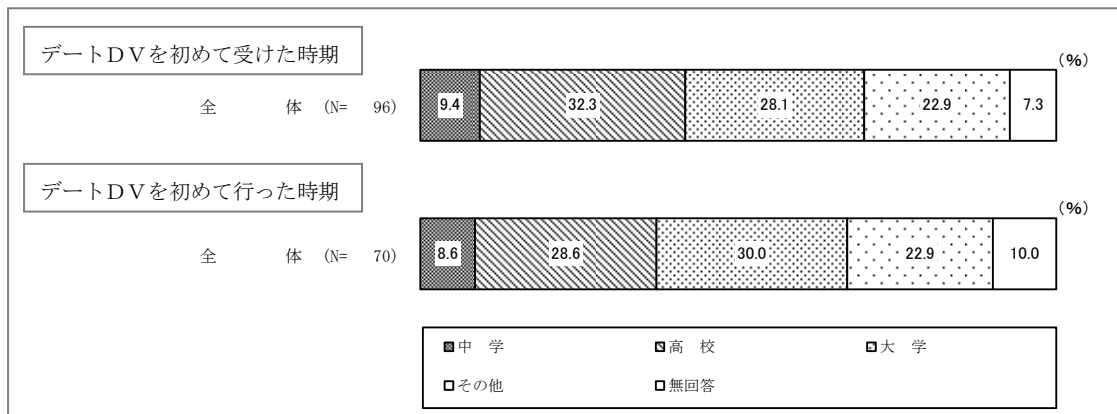


友達などがされたり、しているのを見聞きしたことがある行為は、多い順に「携帯のチェック、友達づきあいの制限」、「大声でどなったり傷つくことばを言う」、「なぐったり、蹴ったり、物を投げつける」となっている。なお、友達などのデートDVを見聞きした際の対応として、「相談にのった」人は63.7%となっている。

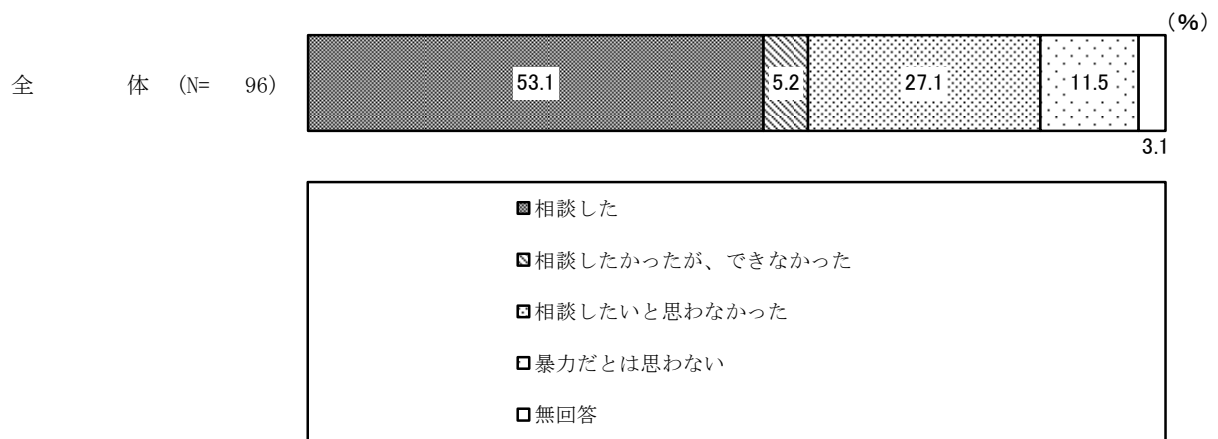
一方、回答者自身の被害経験では、「大声でどなったり傷つくことばを言う」が最も多く9.9%となっている。



また、回答者自身がデートDVを初めて経験した時期は、被害・加害ともに高校・大学で約6割を占めている。

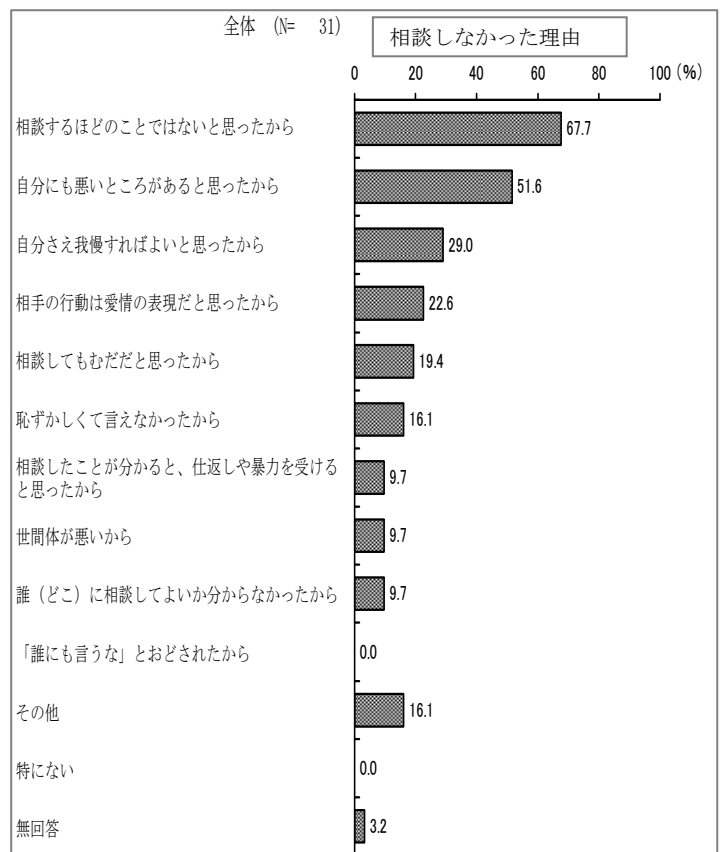
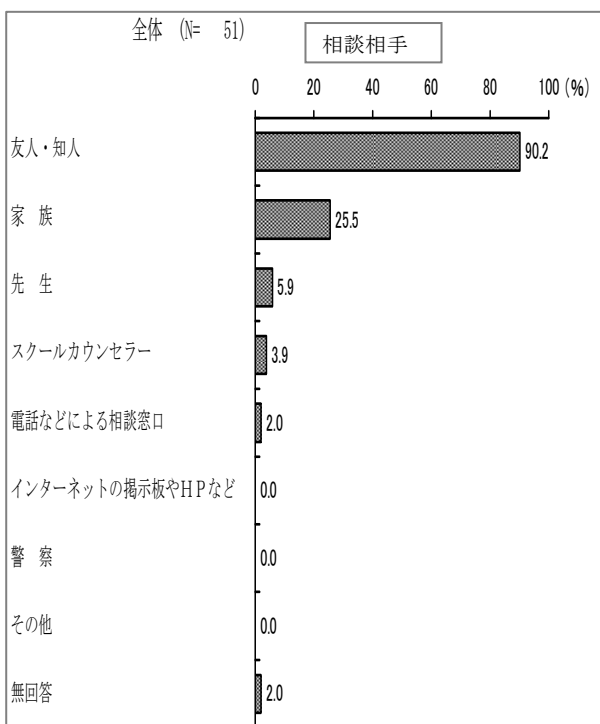


②デートDVを受けた際の相談状況



回答者自身がデートDVを受けたときの相談状況では、「相談した」が53.1%と最も多いが、43.8%は相談していない。

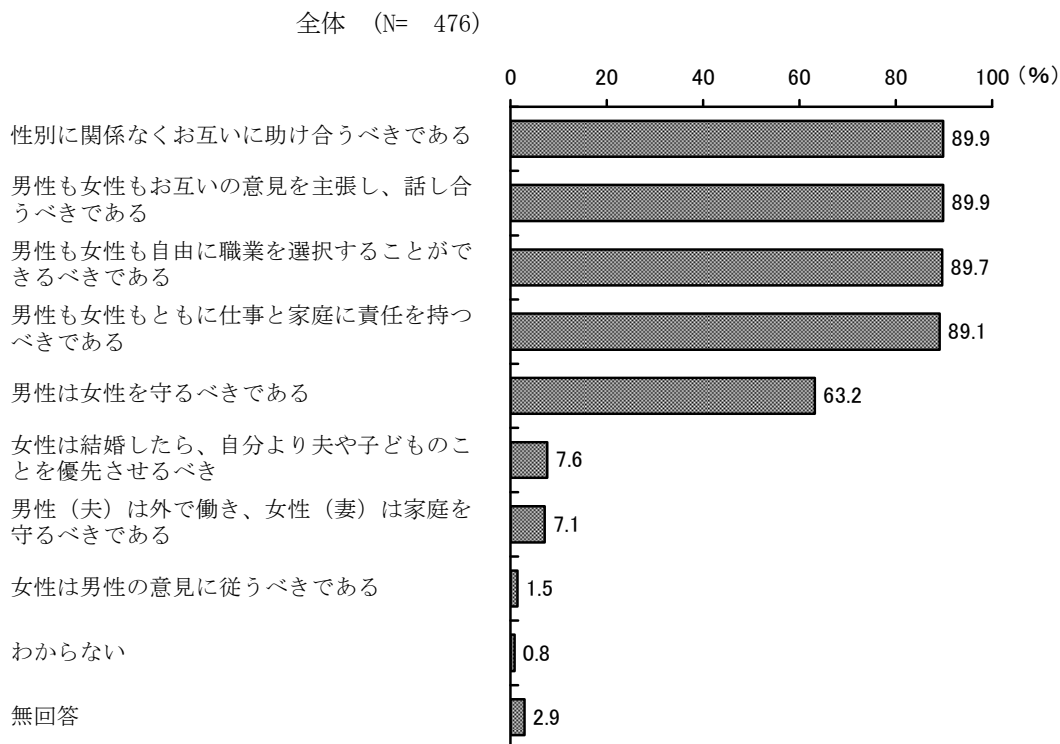
「相談した」人は、男性(45.7%)より女性(57.4%)が多く、「相談したいと思わなかった」人は、女性(18.0%)より男性(42.9%)が多くなっている。相談しなかった理由として、女性は「自分にも悪いところがあったから」、「自分さえ我慢すればよいと思ったから」などが多く、男性は「相談するほどのことではないと思ったから」(93.3%)が多い。また、デートDVを受けたときの相談相手は、「友人・知人」(90.2%)、「家族」(25.5%)といった身近な人への相談が多く、相談後の心情の変化として「気持ちが楽になった」(62.7%)と感じている人が多い。



- ・DVを未然に防止するためには、高校・大学等の若年層への啓発・教育の必要性があることがうかがえる。
- ・女性被害者だけでなく、男性被害者も含め、気軽に相談しやすいよう広く相談窓口を周知していく必要があると考えられる。

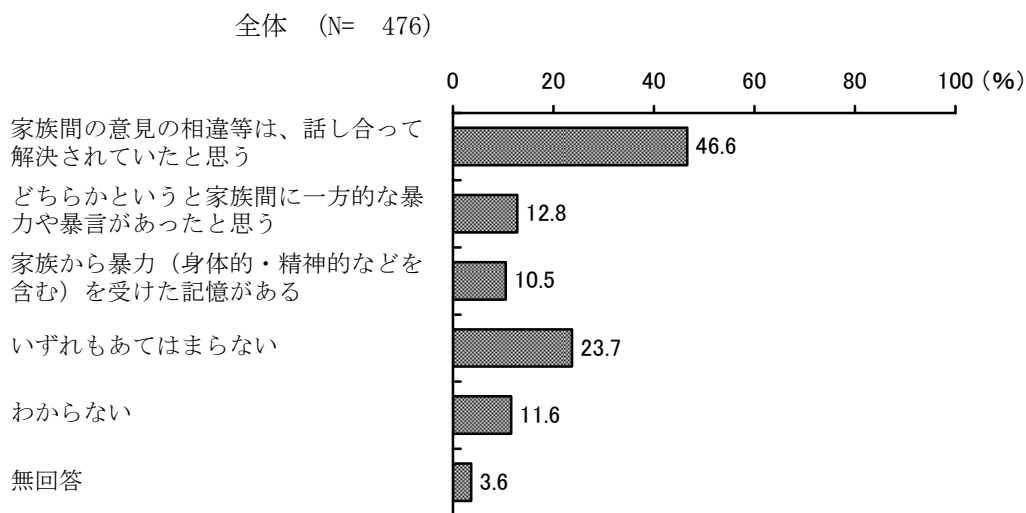
4. デートDVの背景

(1) 性別による固定的な役割分担意識



性別による固定的な役割分担意識では、「性別に関係なくお互いに助け合うべきである」、「男性も女性もお互いの意見を主張し、話し合うべきである」、「男性も女性も自由に職業を選択することができるべきである」、「男性も女性もともに仕事と家庭に責任を持つべきである」が約9割と、否定的な意識を持っている人が多く、性別に見ると特に女性はよりその傾向が強い。また、デートDVに関する学習機会別に見ると、学習機会がなかった人は「女性は結婚したら、自分より夫や子どものことを優先させるべき」が約6ポイント上回っている。

(2) 家庭環境

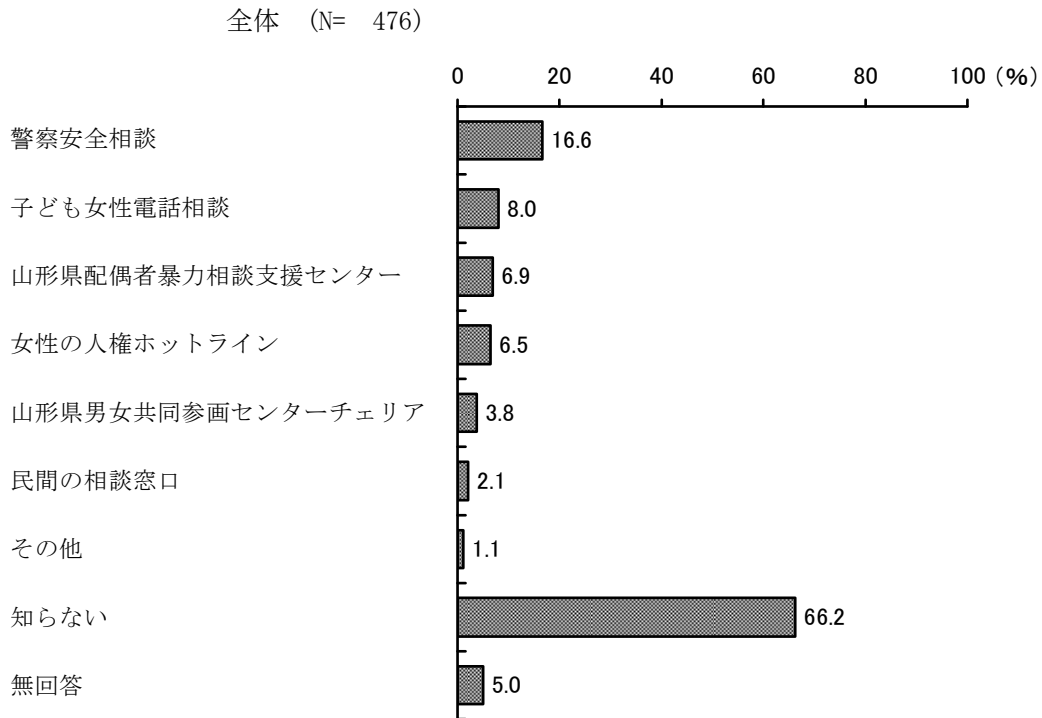


親や祖父母などの家族の関係としては、「家族間の意見の相違等は、話し合って解決されていたと思う」(46.6%)が最も多いものの、「どちらかというとな家族間に一方的な暴力や暴言が

あったと思う」(12.8%)、「家族から暴力(身体的・精神的などを含む)を受けた記憶がある」(10.5%)との回答も見られ、被害経験があった人は、「家族から暴力(身体的・精神的などを含む)を受けた記憶がある」が17.7%とそうでない場合を上回っている。

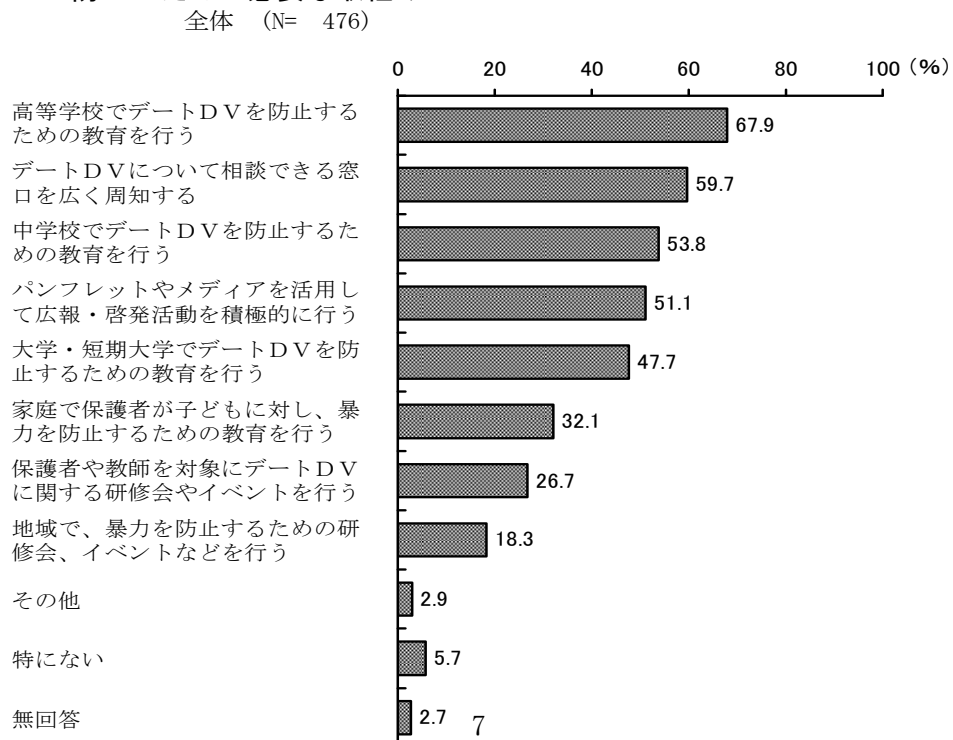
5. デートDV防止のために

(1) 相談窓口の認知度



DVに関する相談窓口の認知については、「警察安全相談」(16.6%)などすべての項目において認知度は低く、「知らない」人が66.2%となっている。

(2) デートDV防止のために必要な取組み



デートDVをなくすために必要だと思う取組みとしては、「高等学校でデートDVを防止するための教育を行う」(67.9%)、「デートDVについて相談できる窓口を広く周知する」(59.7%)、「中学校でデートDVを防止するための教育を行う」(53.8%)、「パンフレットやメディアを活用して広報・啓発活動を積極的に行う」(51.1%)、「大学・短期大学でデートDVを防止するための教育を行う」(47.7%)など、学校での学習機会や周知・啓発を挙げる人が多い。また、デートDVに関する学習機会があった人は、より取組みの必要性を感じており、特に学校での教育が必要だと考えている。



デートDV防止に向けて、学校での学習機会の確保や相談窓口などの周知徹底が必要であると考えられる。